

小田たつえ

作家は言った。

「僕は書けなひ」

チエロ弾きの女は言った。

「何を言ひ出すのですか」

チエロ弾きが、広間で齷齪してゐる。窓の結露が波打つ。

くべた薪が爆ぜ、薬缶の水の蒸発する音が響く。

「前々から思つてゐたことが在つてな」

「なにを」

蒸気の音は相変はらず。

「私は何も真実を言えなひ」

「どんな」

「何？」

「貴方の伝えたい真実、とは」

「さうだな」

宵やみの燭台が照らす、思索の顔。

「僕のみたもの、かな」

チエロ弾きが調律を始める。

「旦那さま」

弦の振動が生温い空気を揺らす。

「ひとつだけ」

「何だひ、言つてご覧よ」

と、チエロのコンツェルトが空気を揺るがす。

空気を介し、鼓膜を揺るがす。何を、と思う男。

しかし、次第に心も揺らぐ。揺らぐ心に注がれる。注ぎ

こまれ、血肉へと変はり往く。

……瓶の底が見えたらしひ。

「……旦那様」

「何、だ？」

「是れを、筆に起こしてみてくださひな」

「あゝ」

それから幾許かの時間が過ぎた。それを思ひ起こして書き綴つた。

だがそれは、結局私の内心を通した、分光である。

でも、これを書かなければ、此の事は残らなかつたやもしれませぬ。さうでせう？

湿り気の多い夜の雨空。飲んだソーダの、炭酸の強いせいでうつつかり零れそうになつたの。

けど、誰も制してもくれなかつた。抑々、人の子一人もいないの。

階段通りの段上で口を拭つた。

けど、ハンカチを差し出してくれる人は、誰もいないの。

ゴオオオ……。

寝付けない。相も変はらず出来ない。眠気の襲うのは言はずとも知つてゐる。

にも拘らず、私の脳は覚醒にある。意識も其れに侵される。

「うっ」

布団の良い塩梅の温さにも意識は、脳は抗い続ける。

「父さん」

隆一の声。私の直ぐ隣の寝台にいる。

「お前、起きていたのか」

「寝られないんです」

「お前もか。生憎私もだ」

お互いに意識を抑えやうと悶える。

「……然し父さん」

「だうした」

「何だか、騒がしひですね、外が」

芋虫の悶え苦しむのを止め、静穩に耳を傾ける。

ゴオオオ……。

「おお」

だうやら、外らしかつた。万物の音が。

しかし、是れは自然だ。きこゆるのもまた自然。

「致し方無ひ事のやうだ」

さう思えたら、脳細胞達が休みを貰いたいと言いだした。

「ぢやあ、寝ますか」

「あゝ」

するりと、深い谷を降りていった。その深淵の往くところまで。

……

陽光の、臉裏迄届くの気付く。日の移ろいを感じる。

そして、あの万物の音が聞こえる。

ゴオオオ……。

「父さん」

「何や」

「扇風機、掛け放しでしたよ」

パチン。遠のくゴオオオ。そして、静。

脳細胞の、一瞬での覚醒。そして嘆息。

殺風景。

君に似て 美しけるは 世に多し

真の君は 我のみぞなる

早春の候、如何お過ごしでせうか。

此方は、桜花の早く咲き散る姿に、えも言われぬ思ひを抱く日々であります。扱て、先日のお手紙、拝読しました。富満子は三ツになりましたか。多忙を極めております故、会へなひのがやはり悔やまれます。代りと言つては難ですが、多めに口座へ入金をしておきましたので、あの子が欲しがつていた玩具を買つてあげてください。

食事は、君が作るののほうが美味しひと思ふばかりです。何時ぞやに食べた茄子味噌の塩梅の良さが忘れられず、此の前無理を言つて作つてもらいました。味気の薄く瑞々しさの無かつたので、口に別の塩気が流れ込んできました。このご時世ではありますが、あの子には確りと食はせてあげてください。

短文ではありますが、此れにて失礼せねばなりません。又、私の研究成果を上層部に発表したらお手紙を差し上げられると思います。桜色の麗しひ貴方と、愛しひ娘へ。
皇紀二六〇五年(以下判読不可)

……

でせう？

《終わりに》

溜まつたメモ書きの消費です。別に何があつたわけでもなく、今年(二〇一九年)に残したメモがもつたいなと思つた次第です。

メモ書きの内容は以下の通りです。

これはこれうそを借りなければ

(八月二十日)

表現できない真実

(九月八日)

夏の夜の雨空。…(諸般の事情により以下省略)

(十月二十七日)

Amartyllis Belladonna

うちのこの子は

いつできた

三月桜の咲くころに

道理で

お顔が

桜色

(同日)

それじゃあ今年に別れを告げて。

二〇一九年十二月二十八日